

健康・スポーツ系学生を対象とした予習レポートによる授業改善の工夫 —WEB アンケートによる評価を活用して—

松本 裕史, 戸山 彩奈

(要旨) 本研究では WEB アンケートを用いて, 健康・スポーツ系学生を対象に予習レポートを活用した授業実践をもとにその効果と課題について探索的に検討することとした。予習レポートとは, 学びに対する能動的な態度の構築を目的とした予習課題であり, 独自のルールを設けている。予習レポートを活用した大学授業の効果を検討した結果, 学生の授業理解の促進および学習意欲の向上をもたらすことが示唆された。

キーワード : 予習レポート, 健康・スポーツ系大学授業, 主体的な学び

1 はじめに

海外に比べると, 日本の大学生は授業外学修時間が少なく, 授業外学修時間の不足が学生の学力不足をもたらすことが懸念されている¹⁾。近年, 大学において生涯にわたって学び続ける力, 主体的に考える力を持った人材の育成が急務とされており, 学士課程教育の質的転換と学生の学修時間の増加は大学教育の喫緊の課題である。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ, 生涯学び続ける力を修得できる²⁾。そのような状況の中で, 多くの大学教員が「どのように学生の学習意欲を向上させるか」という課題を抱えている。

著者が所属する健康・スポーツ系学科はスポーツ推薦入試制度を実施しており, その制度を活用して入学する学生が存在する。牧野³⁾が指摘しているように, スポーツ推薦入試制度で入学した学生は, 入学試験に学力試験を必要とされなかったため, 勉強することを苦手と感じている者も多い。このように多様な学力レベルの学生が入り混じる授業において, 学生の学習意欲を引き出し, 魅力ある学びの場とするための教員の工夫は必要不可欠といえる。

関田ほか⁴⁾は能動的な学修を促すポイントの1つとして, 予習の重要性を指摘している。予習は, 「次に学ぶところを前もって学習しておくこと(広辞苑)」と定義される。我が国において予習の効果を実証的に検討した研究は中高生を対象に積極的に行われている⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾。それらの先行研究から予習は授業理解を促進する効果があることやその効果に個人差が生じることが明らかになっている。篠ヶ谷⁷⁾は, 生涯に渡って効果的に学び続けていくスキルの育成のためには, 学校教育において, より積極的に予習を指導していく必要があると述べている。しかしながら, 健康・スポーツ系の大学

授業として予習課題を活用した実践研究は見当たらない。

大学授業は一度聞いただけで理解できるほど授業内容が簡単なものばかりではない。著者は, 短期大学部1年前期科目スポーツ心理学を担当している。この授業では, スポーツ心理学に関する知識を幅広く学ぶだけでなく, 初年次教育の重要性を鑑みて, 学生の学習態度の構築を意図した工夫として, 予習レポートを活用している。

そこで本研究は, WEB アンケートを用いて, 健康・スポーツ系学生を対象に予習レポートを活用した授業実践をもとにその効果と課題について探索的に検討することとした。

2 方法

(1) 調査対象

近畿圏の総合女子大学短期大学部健康・スポーツ系学科で開講されているスポーツ心理学を平成29年度前期に受講した女子学生82名のうち, 調査参加に同意した73名を対象にした。

(2) 調査内容

調査項目は, 予習レポートの提出状況, 予習時間, 予習レポートを活用した授業の効果および負担感として合計6項目を用意した。各質問項目には4件法から5件法での回答を求めた。さらに, 予習レポートを活用した授業について良い点および悪い点の自由記述欄を設けた。

(3) 手続き

調査はインターネット調査法を用いて授業最終日に行った。WEB アンケートシステムは, クエスタント(マクロミル社)を使用した。クエスタントはQRコード

Hiroshi Matsumoto 武庫川女子大学健康・スポーツ科学部 准教授

Nana Toyama 武庫川女子大学大学院健康・スポーツ科学研究科 修士課程(現:大東市立四条小学校 教諭)

A Study on Educational Effects and Issues of using a Preparation Report in a Sport and Health Sciences Class: Based on a Web Survey

を作成することが可能である。クエスタントを活用する利点として、QRコードをスライドへ投影することによって、調査対象者はスマートフォンを用いてアンケートサイトへ容易にアクセスできることがあげられる。

授業参加者に対して研究の目的、データの取り扱い方法およびプライバシー保護に関する説明を口頭で伝達し、研究参加へ同意した者が調査へ参加した。

(4) 授業内容

全15回の授業のうち、8回の授業で教科書の内容をまとめてくる予習レポートを課した。ここでいう予習レポートとは単なる予習課題とは異なる。学生が作成した予習レポートの例を図1に示す。著者が考案した予習レポートは、学びに対する能動的な態度の構築を目的とした予習課題であり、次のような決まりがある。

①次回の授業内容(教科書内の1テーマ, 2~4ページ)をA4用紙1枚にまとめる。レポート末尾に内容をまとめた後の感想を記入する。②レポートは手書き, 多数の色を使うことや図表, イラストの活用が推奨されている。③レポート提出は任意であり, 提出すると成績評価に加点される。④レポートは授業前に提出する。

教員が行う予習レポートの提出を促す工夫としては次のことを行う。①予習レポートに取り組みやすい教科書を選ぶ。②見本レポートを紹介する。③予習レポートの提出は任意であることを強調し, 自己決定感を

高める。④多くの学生が提出している状況を積極的に伝える。⑤提出されたレポートはチェックしてから返却する。⑥提出されたレポートを活用して前回の復習を授業時に行う。

(5) 分析方法

予習レポートの提出状況, 予習時間, 予習レポートを活用した授業の効果および負担感に関して単純集計を行った。予習レポートを活用した授業の良い点および悪い点に関する自由記述は, 松本ほか⁹⁾を参考にKJ法¹⁰⁾を用いて整理, 集約した。まず, 自由記述をひとつずつカードにした。次に, それらのカードは分析作業間で研究目的をふまえながら議論のうえ, グルーピングを行った。グルーピングが困難な回答は, そのまま独立して扱った。健康スポーツ心理学を専門とする大学教員1名, 健康・スポーツ科学を専攻している大学院生1名の合計2名で分析作業を実施した。なお, 本研究において分析の過程で予習レポートと関連のない記述であった4項目は除外した。

3 結果

(1) 予習レポートの提出状況

予習レポートを提出した(「毎回提出した」および「ほとんど提出した」と回答した学生は91.8%であった(図2)。全く提出しなかったと回答した学生は, 4.1%(3名)であった。

(2) 予習レポートによる予習に対してかかった時間

予習レポートによる予習に対してかかった時間は, 平均して30分~1時間という回答が最も多かった(図3)。

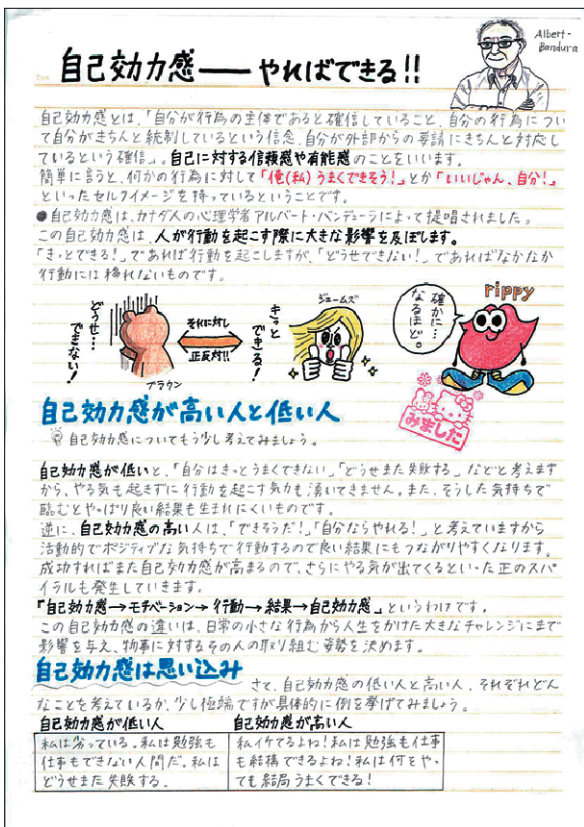


図1. 受講学生が描いた予習レポートの例

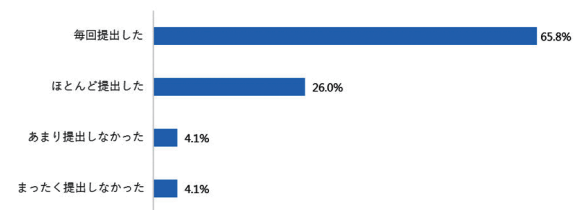


図2. この授業の予習レポートを提出していましたか?

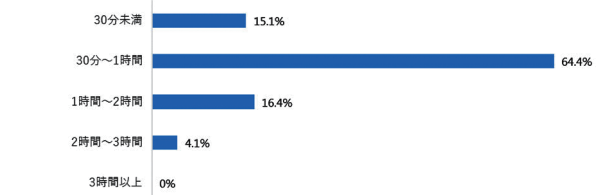


図3. 予習レポートに対して、平均してどのくらいの時間をかけましたか?

(3) 予習レポートを活用した授業の効果

予習レポートを活用した授業の効果に関する回答を図4から図6に示す。予習レポートは授業内容を理解する助けになったかという質問に対して、約8割（とても助けになった 27.4%，まあまあ助けになった 47.9%）が肯定的な回答を行った（図4）。予習レポートを活用した授業が主体的な学びを促進したと思うかという質問には、約7割（69.8%）が肯定的な回答を行った（図5）。最後に、今後さまざまな授業で予習をしてから授業にのぞもうと思うかについては、約6割（とてもそう思う 17.8%，少しそう思う 38.4%）が肯定的な回答を行った（図6）。

(4) 予習レポートの負担感

負担があると感じる（「とてもそう感じる」および「少しそう感じる」）と回答した学生は57.6%であった（図7）。負担がない（「あまりそう感じない」および「全くそう感じない」）と回答した学生は、24.6%であった。

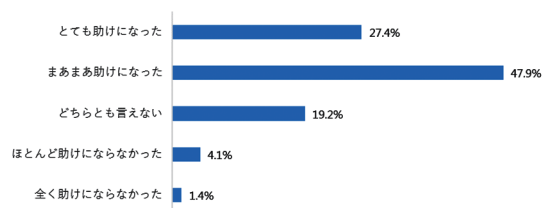


図4. 予習レポートは授業内容を理解する助けになりましたか？

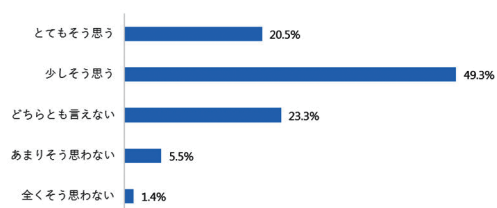


図5. 予習レポートを活用した授業はあなたの主体的な学びを促進したと思いますか？

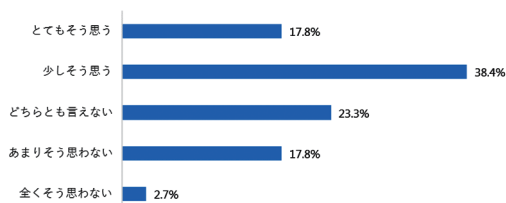


図6. 今後さまざまな授業で予習をしてから授業にのぞもうと思いますか？

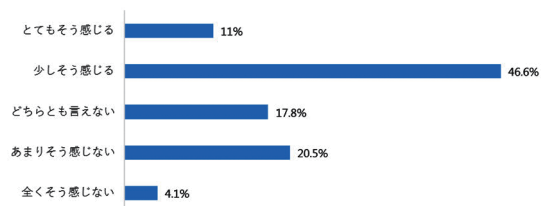


図7. 現在、予習レポートを書くことは負担があると感じますか？

(5) 予習レポートを活用した授業についての良い点

予習レポートを活用した授業について良い点の有効回答数は18であった。作業者による分析の結果を表1に示す。「授業の前にやることや、自分の考えと比べることによって授業の進み方が分かるので理解しやすかった」など4つの回答を集約して「自己学習による理解との比較」という下位カテゴリが得られた。同様の手続きによって合計6つのカテゴリが得られた。それらを集約した結果、「授業内容の理解および関心の向上」「予習レポート活用による学習意欲の向上」「予習する習慣の定着化」「記憶力の向上」「肯定的なフィードバックの機会」という5つの上位カテゴリが得られた。

(6) 予習レポートを活用した授業についての悪い点

予習レポートを活用した授業について悪い点の有効回答数は11であった。作業者による分析の結果を表2に示す。「部活があるのでやる時間がない」など3つの回答を集約して「時間的負担」という下位カテゴリが得られた。同様の手続きによって合計5つのカテゴリが得られた。それらを集約した結果、「予習レポートの負担感」「授業内容に対する興味の低下」「授業内容に対する物足りなさ」という3つの上位カテゴリが得られた。

4 考察

本研究の目的は健康・スポーツ系学生を対象に、予習レポートを活用した授業実践をもとにその効果と課題について探索的に検討することであった。

予習レポートの提出状況に関しては、約9割以上の学生がほとんど提出したと回答した。今回、教員が授業期間の初期において、予習レポートの提出は任意であると強調すると同時に、周りの学生は提出している雰囲気醸成した。そのことで学生の予習レポート提出に対する自己決定感が高まり、継続的なレポートの提出に結びついたといえる。そのほかに学生のレポート提出の関連要因として、成績評価に加わる点やレポートの有意義課題としての実感がある点があげられる。

予習レポートを活用した授業の効果に関して、5段階評価によるアンケートと学生からの自由記述の回答（予習レポートを活用した授業の良い点）を中心に考察する。

予習レポートの授業理解促進に関して、約8割が肯定的な回答を行った。自由記述の回答において上位カテゴリをみると、「授業内容の理解および関心の向上」に関する回答が最も多かった。予習レポートを課さない授業の場合、授業中が知識習得の機会となる。その場合、学習者は教員の話聞き逃さないようにテキストを確認し、ノートを取りながらの授業になり、受動的学習になりがちである。自由記述において、「記憶力の向上」があがっている点からも予習レポートを課すことによって授業中は知識の定着の機会に変わるといえる。予習の効果について先行オーガナイザー（こ

れから学ぶ中心的内容について抽象的、概念的な枠組みあるいは概念的知識）の影響が示唆されており⁵⁾、本研究の結果は先行研究の知見を支持するものであった。

予習レポートの主体的な学びの促進に関して、約7割が肯定的な回答を行った。自由記述の回答において、「予習レポート活用による学習意欲の向上」があがっている。これは予習によって授業内容の理解が促進され、「授業内容がおもしろい」「自分の活動に役立てたい」といった内発的動機づけが高まったと解釈できる。主体的な学修の促進に内発的な動機づけが重要であることに疑う余地はない。予習レポートが学生の動機づけに及ぼす影響に関しては、今後詳細な検討が必要とされるが、学習意欲の向上に予習レポートが有効であることが示唆された。

表 1. 予習レポートを活用した授業の良い点

上位カテゴリ	下位カテゴリ	実際の回答
授業内容の理解および関心の向上 (9)	自己学習による理解との比較 (3)	授業の前にやることや、自分の考えと比べることによって授業の進み方が分かるので理解しやすかった 自分でまとめたことで理解が深まり、授業への関心が深まった 自分なりに理解して授業に臨めること
	理解度の向上 (6)	授業の理解度がとても高く感じ、楽しく授業を受けることができた 授業の理解が早くできる。授業が復習としてできる 事前のレポートで分からないところは授業で分かるので良いと思った 授業の理解が深まる 授業で習うことが頭に少し入った状況で授業を聞くことができるので内容が入ってきやすい点 初めて聞くよりは予習でやったな〜って思うから内容が入りやすかった
予習レポート活用による学習意欲の向上 (5)		自分がわかった上で授業に取り組むことができるのでよかった 授業に入り込みやすい 事前に内容が分かる 「あ！これ予習でやった！」と、ある程度内容を覚えているので、授業を聞いている途中でわからなくなり受ける気を無くす、ということがない 興味を持てる内容には積極的に勉強したいと思った 予習をする習慣ができるのはいいことだと思います
予習する習慣の定着化 (1)		
記憶力の向上 (1)		自分が書いた内容を覚えていること
肯定的なフィードバックの機会 (2)		いい予習レポートをみんなに見していたこと 大変やったけどいいレポートやねって言われたときは嬉しかったし、勉強の予習になった

表 2. 予習レポートを活用した授業の悪い点

上位カテゴリ	下位カテゴリ	実際の回答
予習レポートの負担感 (13)	時間的負担 (3)	部活があるのでやる時間がない 部活で毎日帰りが遅いため、かなり負担になる 時間がかかる。他のことができない
	方法的負担 (3)	予習はとて面白いと思うけど、内容を頭に入れるというよりか点数稼ぎにしか思えなかった 教科書がまとめてくれているのでわざわざ自分でまとめる必要はないと思う 復習レポートのほうが理解しやすい
	精神的負担 (2)	毎週面倒くさかった 忘れていて深夜に気づくことがある
授業内容に対する興味低下 (1)		どんな授業内容するのかのワクワク感がなくなる
授業内容に対する物足りなさ (1)		せっかくみんな予習をしているのだから、もっと深いところまでやらないと同じことを時間をかけてやる授業のように思えました。時間の無駄だと感じました

今後の授業に対する予習の実施意図に関して、約 6 割が肯定的な回答を行った。自由記述の回答においても、「予習する習慣ができるのはいいことだと思う」という回答があげられた。つまり、授業での予習レポートの活用は、学生に予習が有意味であることを実感させ、他の授業においても活用しようとする動機づけになるといえる。予習は学習サイクル（予習—授業—復習）の始発的にあたる活動として、深い授業理解や質の高い復習を実現する上で重要な役割を果たすと考えられる⁷⁾。したがって、大学初年次にあたる授業において予習レポートの活用は、学生のそれ以後の主体的な学修体験の積み重ねにつながり、ひいてはスタディスキルの育成へと結びつく可能性があるといえる。

次に予習レポートを活用した授業の課題に関して、アンケートと自由記述の回答（予習レポートを活用した授業の悪い点）から述べる。

予習レポートの負担感に関して、約 2 割の学生からとても負担感があるとの回答があった。自由記述の回答において上位カテゴリをみると、「予習レポートの負担感」に関する回答が最も多かった。その内訳として下位カテゴリは「時間的負担」「方法的負担」および「精神的負担」に分別された。予習レポート実施の負担を感じることを裏返しとして恩恵を感じていないことが考えられる。つまり、大きな負担を感じる学生は予習レポートの効果を実感していないといえる。篠ヶ谷⁵⁾は予習の個人差に着目した研究を行ったところ、予習の効果は意味理解志向の高い学習者ほど大き

く、意味理解志向の低い学習者には見られないことを明らかにしている。意味理解志向とは学習観のひとつであり、情報の関連を理解することを重視する姿勢である⁵⁾。本研究の対象者においても、予習レポートを点数稼ぎとしてとらえ、内容の関連付けを行わずに単なる作業として作成していた者は予習の恩恵を実感することができなかつたといえる。このことから教員は予習の効果は一様に得られるわけではないということを理解したうえで、学習者に対して予習の意義を丁寧に伝えようとする姿勢が求められる。

そのほかの予習レポートの課題として、「授業内容に対する興味低下」があげられた。市川¹¹⁾は予習として先に内容に触れることで授業への興味が損なわれてしまうという意見もあると指摘している。一方、篠ヶ谷⁵⁾の研究によって予習は授業への興味を下げないことが明らかになっている。したがって、予習レポートが一樣に学習者の授業への興味を低下させると結論づけることはできないものの、授業内容によっては予習レポートの負の影響が生じることを理解しておく必要がある。たとえば、授業が予習の繰り返しになるような場合、学習者の興味は低下することがあげられる。自由記述において「授業内容に対する物足りなさ」があがったことから、予習レポートを活用した授業においては、学習者が予習によって得た知識を土台として、多様な知識の関連付けによる精緻化が促進される授業内容を展開することが重要となる。

5 まとめ

大学生の学力低下が深刻なものとなって以来、学習者の理解度の把握、課題の提出および返却時の指導の仕方など、現在の大学教員に要求される指導力は以前にも増して高くなっている¹²⁾。本研究では健康・スポーツ系学生を対象に、WEB アンケートを活用して予習レポートによる授業実践の効果と課題を明らかにした。その結果、予習レポートを活用した大学授業は学生の授業理解の促進および学習意欲の向上をもたらすことが示唆された。今後の課題として、学生の学習観には個人差があると考えられることから、予習レポートの負担感をなるべく感じさせないような工夫を行うと同時に、恩恵を感じるような働きかけを行っていくことが必要といえる。

引用文献

- 1) 矢野浩二郎. 共通系生命科学講義における反転授業“アクティブラーニング型授業としての反転授業”(森朋子, 溝上慎一), p3-14, ナカニシヤ出版, 京都, 2017.
- 2) 中央教育審議会大学分科会. 「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」審議まとめ, 2012.
- 3) 牧野眞貴. スポーツ推薦入学生クラスにおけるアクション・リサーチ授業改善による学習姿勢の変化—近畿大学英語研究会紀要, 7, 87-98, 2011.
- 4) 関田和彦, 山崎めぐみ, 上田誠司. 授業に生かすマインドマップ. ナカニシヤ出版, 京都, 2016.
- 5) 篠ヶ谷圭太. 予習が授業理解に与える影響とそのプロセスの検討. 教育心理学研究, 56, 256-267, 2008.
- 6) 篠ヶ谷圭太. 高校英語における予習方略と授業内方略の関係—パス解析によるモデルの構築—. 教育心理学研究, 58, 452-463, 2010.
- 7) 篠ヶ谷圭太. 予習時の質問生成への介入および解答作成が授業理解に与える影響とそのプロセスの検討. 教育心理学研究, 61, 351-361, 2013.
- 8) 篠ヶ谷圭太. 高校英語における予習および授業中の方略使用とその関連—教師の授業方略による直接効果と調整効果に着目して—. 教育心理学研究, 62, 197-208, 2014.
- 9) 松本裕史, 戸山彩奈, 加治由佳子. 大学授業における予習としてのマインドマップの活用. 武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編, 65, 19-26, 2017.
- 10) 川喜田二郎. 続・発想法, 中公新書, 中央公論新社, 東京, 1970.

11) 市川伸一. 学ぶ意欲とスキルを育てる—いま求められる学力向上策—, 小学館, 東京, 2004.

12) 佐藤敏子, 中川武, 山名豊美. 英語学習に関する基礎的調査—学習動機と学習方法—. つくば国際大学研究紀要, 14, 43-59, 2008.

謝辞

平成 29 年度 武庫川女子大学 FD 推進委員会主催勉強会「学生が学ぶ喜びを感じる授業とは？」において予習レポートに関する事例紹介をし、ご参加いただいた先生方のご意見から多くの示唆を得ました。ここに謝意を表します。